

第4章 経済の発展と人々の暮らし

豊稔池の築造

「大関耕地整理 明治三十二年に「耕地整理法」が制定され組合」の設立 た。しかし、この法律は区画整理事業中心の内容であったため、小規模経営を主とする当時の日本農業にはさなかつた。このため同四十二年には改正が行われ、区画整理よりも灌漑設備・水対策の事業を主目的とするものになった。同時に、事業主体も、明確な権利義務を持つ法人格の耕地整理組合へと改められた。

明治二十七 二十八年、大野原の農民は二年続きの大干ばつに見舞われ大きな打撃を被った。このころから、常習的な水不足を憂う人々のあいだで、新池築造の構想が練られ始めていた。この動きは、その後紆余曲折を経て大関耕地整理組合の設立へとつながるのである。

「豊稔池の築造」(豊稔池土地改良区)によれば、大関耕地整

理組合の設立準備委員会とも言うべき遂行委員会が大正三年十月九日に大野原八幡神社社務所で開かれていた。また、同年十一月五日に開かれた委員長・相談役会において組合規約案を審議決定し、組合名も決定された。名前の「大関」は、定かではないが、「大」は大野原の大、「関」は井関池の関を意味するのではないかと伝えられている。

「大関耕地整理組合」は、大正七年十二月二十七日に設立認可された。この組合は、当初、井関池と大谷池の拡張を目的としていたが、関係地域が広く、さまざまな利害が絡み、総論賛成各論反対でなかなか進展が見られなかった。

しかし、大正十一年の組合会において、当時の末沢平吉組合長による第一区(井関池地区)、第二区(大谷池地区)、第三区(広庄池地区)の三区制採用と、それぞれの区による独立事業案が議

決され、それに続く大野原村評議員加地茂治郎による田野々新池築造計画の提案によって、ようやく新しい水源獲得の第一歩を踏み出した。

豊稔池築 大正九年の大干ばつ時と同様に、大正十三年の夏造の過程も空梅雨であった。七月に入っても雨は降らず、池の水は涸れ、飲料水にもこと欠くほどで、干ばつの脅威が目前に迫っていた。農民たちは、誰いうとなく三々五々大野原八幡神社に集まった。小作人を主とする農民の数はしだいに増え、なかなか進まぬ新池築造計画に怒り、工事の早期着工を訴えることを決定した。彼らは組合や未同意の地主らを尋ねて早期着工を強く訴えた。百姓一揆にも似たこのような農民たちの行動は、その後の動きに大きな影響を与えたと思われる。

末沢組合長に代わった加地茂治郎は、大正十三年十二月十四日、東京して香川県選出の三土忠造（政務官、後農林大臣）に田野々新池築造計画を説明するとともに、工事への助成を要請した。三土の助言をうけた加地組合長は、帰郷すると知事や県議会議員を訪ね、田野々新池工事を県営用排水事業として実施するよう請願した。県議会はその主旨を了承し、工事は県営事業（国庫補助事業）として実施されることが決定した。

こうして工事は県営事業となったが、加地はこの工事を救農土木事業として考え、地元から人夫を調達し、土木労働者として技能を修得させること、建設資金が地元を潤すように配慮することを県に請願している。なお、加地茂治郎については、第五編近代

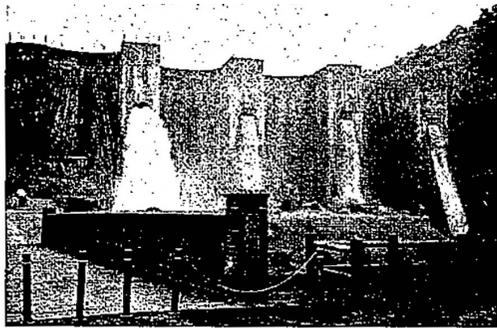


写真15 豊稔池（サイフォンからの放流）

セメントの資材を牛車に積んで運んでいる牛の背中が、水を打ったように汗が光り、これを引き綱で引く駆者の額からも玉のような汗が流れ、子供心に強い感動をうけた」と、地域農民自らの汗と脂で築かれた思い出を語っている（前出「豊稔池の築造」）。

豊稔池の概要
豊稔池は香川県の西南端、大野原町五郷田野々に所在し、梓田川（二級河川）上流の唐谷川に築造された農業用ダムである。

このダムは、マルチプルアーチダム（多拱扶壁式粗石モルタル積石堰堤）という、当時としては画期的な工法により建設されて

いることで全国的に有名である。その他にも、サイホン式洪水吐やコンクリートブロック製の堰堤アーチなど随所に斬新な技術を取り入れている。北欧の古城を思わせるような景観も、周囲の自然と調和して魅力的である。まさに、満濃池と並んで讃岐のめだしのシンボルの存在

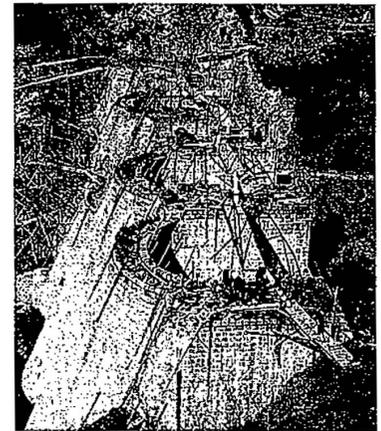


写真14 豊稔池の築造（工事途中の豊稔池より）

一九二九の指導によった。一般に、ダムは底辺が厚く上方が薄い安定感ある形状が常識であるが、ダム直下から見上げると、堤が覆いかぶさるように逆傾斜している豊稔池の設計は、当時の人々を驚嘆させた。

工事はすべて地元の組合が行い、築堤材料の石は現地で採掘した。セメントや砂は海岸から牛車で運び、農民自ら足場を組んで、四年の歳月と一五万人の努力によって築き上げられ、豊稔池は昭和五年三月に完成した。「豊稔池」という命名は、前年の昭和四年五月、三土忠造大蔵大臣、浅利三郎香川県知事らが田野々池を視察後、加地組合長宅にて行った。

田野々生まれの藤川松太郎（元豊南農協組合長）は、少年時代、毎日、豊稔池（田野々池）の工事現場を眺めながら小学校へ通学していたが、当時の記憶として「厳寒だというのに急坂を砂

であり、平成九年（一九九七）九月三日、国 登 形 化（第三七〇〇一七号）に 録されている。

豊稔池主要工事概要

堰堤型式	マルチプル・アーチダム（多拱扶壁式粗石モルタル積石堰堤）
貯水量	一五九万三〇〇立方メートル
堤 長	一四五メートル
堤 高	三〇メートル
最大水深	二五メートル
満水面積	一六ヘクタール
集水面積	一〇〇〇ヘクタール
総事業費	五二万九八〇〇円
人夫延人員	一三万四八〇〇人
石工、鑿治	大工、坑夫 一万六〇〇〇人
工期	大正十五年三月二十七日 着工 昭和五年三月二十七日 竣工

【讃岐のため池誌 より】

豊稔池の築造により新たな水源は確保され、貯水の有効利用を図るため、昭和四年から三か年にわたり配水状況を調査 修正して昭和七年に配水機構を確立し、豊稔池普通水利組合（管理者大野原村長）へ移管した。なお、当時の「かんがい支配面積一覽表」によれば、その面積は、六五〇町五反九歩となっている（「讃岐のため池誌」）。

昭和四年の干ばつは、豊稔池の暫定貯水により被害を免れるこ

とができた。しかし、昭和十四年には歴史的な大干ばつに見舞われた。豊稔池の築造による水源供給力の強化は、畑地から水田への転換を促し、一一三町七反の新しい水需要を産み、更に新たな水源開発が必要となった。このため、新池の築造や水利機構の見直し、二葉、千歳両池の拡張工事など積極的な対応がとられた。また、地下水も豊富になったため、このころ発明された発動機による揚水ポンプは、大野原地域で一五〇〇台を教え、県下第一の常習干ばつ村は文字どおり豊稔村へと変身することができた。

豊稔池堰堤の基礎は、砂岩や頁岩層^{ウツク}でできており、コンクリートダムの基礎としては必ずしも良質ではない。そのため、昭和二十二年秋には左岸アーチ部付け根で亀裂漏水が生じ、昭和二十三年、二十四年度に県営工事として補強を行った。しかし、完全な止水には至らなかった。

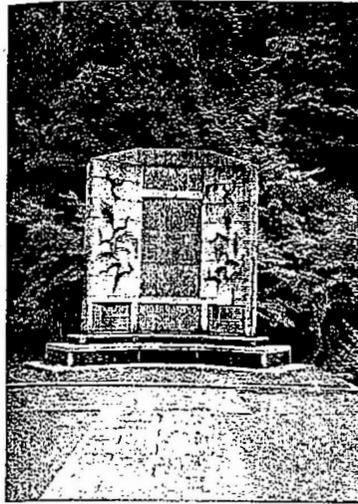


写真16 豊稔池碑

その後、豊稔池も築造後半世紀余りを経過し、昭和五十年代後半になると堤体に亀裂・漏水が目立つようになったので、平成の大改修が行われるが、この経緯については、第六編現代第四章第四節四項に詳述されている。

豊稔池の堰堤右岸部には、昭和八年八月建立の豊稔池碑（高さ三・四メートル幅五・〇メートル）が静かに立っている。題字は三土忠造鉄道大臣の書によるもので、碑の制作は昭和三十一年に薮響^{ヨウキョウ}の重要無形文化財保持者（人間国宝）となった磯井如眞氏（当時、香川県工芸学校教諭）で、銅板には築造に至った背景と経緯が刻まれている。台座には由良石が用いられ、そのデザインといいこのダムにふさわしい碑である。

三 大谷池の決壊

沿 革

大谷池は、伝承によると、地藏院中ノ坊十八世慶恵上人により、文明二年（一四七〇）に築かれたという。大谷池土地改良区が管理運営している池である。

この池は、築造後も大野原開拓の進展に伴う水需要の増加により、何度も改修が施された。「讃岐のため池誌」によれば、慶長二年（一五九七）に領主生駒親正による嵩上げ工事と導水路開削工事が始められ、慶長五年に完成している。この時、領主から与えられた家紋（波切り車）が井関池東余水吐の岩盤に刻まれている。